



堀田善衛全集 5

筑摩書房

堀田善衛全集 5

一九七四年一〇月二〇日第一刷発行

著者 堀田善衛

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八  
電話東京二九一―七六五一（代表）  
郵便番号一〇一―一九一  
振替東京四一二三

印刷 明和印刷株式会社  
製本 和田製本工業株式会社

堀田善衛全集

5

目次

鶴のいた庭

黄金の悲しみ

明日、泣け<sup>あした</sup>

背景

香港にて

主題と変奏

河

零から数えて

## 第一章

A 雨ノナカヲアルイテイルダケダヨ

B 斯る者は死を望むなれども……

C わたしと、寝てくれますか？

## 第二章

α あれ、なんなの？

3

17

32

44

64

88

105

171

171

171

184

192

200

200

$\beta$  "A" について

$\gamma$  その上で、同じことを……

### 第三章

X 5・4・3・2・1……0

Y 成劫、住劫、壞劫、空劫

Z 永生が入用なのですが

### 第四章

$\alpha$  月↑光↑党↑  
↑ライト・パーティ

$\psi$  こりや最低だな

$\omega$  FIASCO大さ  
わぎ

エピローグ

その姿

黄塵

戯曲

運命

332

解説 昭和三十年代の苦渋と苛立ち

佐々木基一

解題

393 385

河  
零から数えて  
他





ストックホルムにて案内嬢と、1958年

## 鶴のいた庭

いまでも私はありありと思ひ出し、その景を眼に見ることが出来る。はじめて飛行機を見たのだ。

ブズ、ブズ、ブズ……というエンジンの音がして、二枚の羽をもった機が二上山ふたかみの上に浮んでいた。それがただの機械であるとは、私は決して思わなかった。それは機械以上のもの、何であれ、とにかく以上のもの、であった。

『どこへ行くのだろうか？』

と、ふと私は思った。

どこへ行くのだろう、というこのことば。これがそのとき以来、一貫して私の耳に、特に人生のかわり目ごとに、ブズ、ブズ、ブズ……という、幼い耳にとりついてしまった爆音といっしょになって聞えて来る。私が何かを予感するとき、とりわけて何か意味深いものが私に訪れて来ると予感するとき、この音が記憶の、重畳とかさなつた山々の向うから鼓膜を圧しつけにやってくるのである。

それからわずかに三十年あまり、ついこのあいだのこと

としか思えないのだが、きょうこのごろ、複葉機などはとうになくなってしまい、プロペラでさえが、もうなくなりかけている。エンジンも、二つ、四つと二倍にも四倍にもなつてしまつている。

けれども、自分は、世の中はどこへ行くものだろう、いったいこれら一切のものに、行先などというものが果してあるのだろうか、という、遙かな、むかしからつづいていゝる思いは、一向に、何の答えも与えられていない。

あの型の飛行機は、ブレゲー型といつたらうか。小学一年生のとき、丘の上にたつた新しい小さな家の二階の、そのまた屋根へのぼつて私は眺めていたのだ。低い、三百米ほどしかない二上山の嶺を、のめるようにしてやつと越えて来た飛行機は、待ちどおしいほどにゆっくりと暇をかけて近づいて来、ブズ、ブズ、ブズ……という音を、頭上近く来てからは、パツパツ、パツパツ……というような、やや不規則な響音にかえ、しつとりとして湿度の多い、晩春の空

気をふるわせて、丘の下の、緑の稲田に薄い影をおとしていた。

稲田の向うには、海沿いに能登街道が通り、松並木が鉛色の日本海を背景にして立並んでいた。その松並木の間に白ペンキを塗った異国風の建物の、避病院が見える。避病院というのは、法定伝染病の患者だけを収容する公立の病院で、患者のないときには、戸も窓もしまっていた。前景の稲田の緑、松並木の黝んだ色、午後の光に映える避病院の白ペンキ、海の鉛色、これが幼い私が小学生の頃に眺めて育って来た色彩であった。避病院の白ペンキは、私にとつて西洋であった。

飛行機は、パツパツ、パツパツという音を、稲田の上をとび去るにつれて再びブズブズブズという音にかえ、松並木と避病院を越えて海の上に出た。

ふと見る水平線には、その年はじめての蜃気楼が出かかっていた。水平線の左端は能登半島、右端は米騒動の第一撃を放ったことで名をえた滑川あたりの海岸になるのだが、その海の左端と右端に、松並木と同じほどな暗緑の色をたつぷり筆に含ませて、宙空の暗い青の色の紙ににじませたような、水気の多い色のかたまりがあらわれ、眼に見えぬ筆が左右からまんなかに向って上下に色をにじませながらすすんで行き、中央でそれがいっしょになったかと思うと、

次第に左右の端からふたたびぼやけはじめる。水平線と、その横に長い水気の多い宙空の水墨の絵とのあいだは、指一本ほどの幅だけ、すいていた。私は、息をつめてこの蜃気楼よりも、そのすき間を、胸をしめつけられるような思いで眺めていた。ぼやけはじめると同時に、しかし、まんなかから心持ち左に近く、二軒の赤い屋根の家らしいものが見えた。恐らくこの景は、シベリアの森林地帯をうつし出したものであらうと思われた。大抵の蜃気楼は、広々とした森林をうつし出していたから……。

複葉の飛行機が、次第に音も姿も小さくし、二枚の羽も一枚にかさなり、その消えがての赤い屋根の上あたりを飛んでいたとき、私はふたたび呟いた。

『どこへ行くのだろう』と。

蜃気楼も飛行機も、幼いものの眼の前に、あらわれては消えて行くものであった。

それは、私がまだこの世の風景や装飾の背後にかくされているものを知らなかった時代に属する。白いペンキ塗りの避病院を、ひたすらに西洋であると思ひ詰め、そのなかはどういう人が入れられているか、ということさえ、私はきわめてぼんやりとしか知らなかったのだ。その建物のな

かへ、出来れば入院してみたいとさえ、私はねがっていた。腸チブスなどという病氣の名を聞いても、私は、チブス、という、なにやら恐ろしげではあるが、とにかく新奇な、そのことばの響きに魅せられうっとりとしさせられるようなものを感じていた。

けれども、幼い私も、答えを得る術のないものに対して『どこへ行くのか?』と問うことの詮なき、その奇妙さを知らないわけではなかった。避病院から、松並木に沿って眼を右の方へうつすと、瓦屋根や、丸い石をおいた板葺屋根の町並みが見えて来る。その町並みのなかに、一軒、白壁の倉にとりかこまれた、屋根の上に小さな望楼のついた家がある。それが、私の生家であり、いまにいたるまで数百年ほどのあいだ、それこそ先祖代々ということだが、他の何物よりもびったりするような、多くの人々が長く長く住みついて来た、古くどっしりとした木組みで出来た家であった。『家』ということばにふさわしいような家であった。スイスや中欧などの写真帳を見ていると、屢々何百年か歳を経た農家のそれが出てくるがあるが、そういうものを見ると、私はこの家を想い出す。

しかしその『家』に、既に私たち一族は住んではいなかったのだ。広い稲田をあいだにおいて町筋を見下す丘、いまのことばでいえばこの北国の小さな港町の郊外の丘に、

新しい小さな家を建ててうつり住んでいた。だから、その新しい家から古い家を見下すなら、『どこへ行くのか?』という問いはともかくとして、人がどこかへ行き、かつ行かねばならぬものだけというだけでは、いかに幼くても納得しないわけにはゆかなかった。

たとえ何百年ものあいだ、人が一つところに住んで来たとはいえ、それだけではいつまでも同じところに住み、同じことをしていいということにはちっともならないということ、うつるべきときが来たならば、矢張りうつらなければならぬものであるらしいこと、そのことが、後年おぼえたことばでいえば、万物は流転す、とか、諸行は無常なり、という風なことばでいえるようなものを、まだ私たちのない、それゆえに恐らくは浅からざるものとして、これだけは動きもうつろいもせぬものとして、私にうえつけた。後になって、物事のうつろわざるをえぬ所以、たとえばこの『家』の潰滅せざるをえなかつた時代のうつりゆき、経済的、政治的なもの理由を知りえても、それでもなお、それらの現実的な諸理由、ととのつた条件などの説明分析をも乗り越え、それらを押しつけさえず、より強い、より基本的なものとしてこの流転の感、無常の感がどっしりと、幅も根も広く深いものとして私にのこっていた。

私は、兄達とは違って、暗い仏間に長く坐っていることを、それほど苦痛とすることがなかった。

夕暮れ時、暗い仏間に、小さい背中をまげて坐り込み、よりいつそう背をまるくした祖母が、ぼす、ぼす、ぼす、ぼす、という音をたてる木魚を叩いて読経する。そのしめやかさ、その陰暗さを、むしろ私は愛していた、と言っているかも知れない。

丘の上の新しい家の仏間は、十畳の間と八畳の間にはさまれた細長い四畳であった。昼中でも薄暗いこの仏間の正面には、畳から天井までの大きな仏壇がはめ込んであった。そして町筋のなかの古い家のそれは、八畳ほどあったが、それも矢張り薄暗かった。私たちが、この新しい家に引越したのは、大正十三年、私が小学校に入った年であった。

祖母の背後に坐り、木魚のぼす、ぼす、ぼすというリズムを耳にし、その響きを消したような音にあやされながら、私はひたすらに大人の世界のことを考え詰めていた。仏壇の上の方では、金色の、でっぶりふとった仏が、いつも変らぬ表情で祖母と私とを見下していた。その仏の表情が、いつも変らぬ、絶対に同じだということが、いつも私を異様に感動させた。

新しい家にうつる前、広大な古い家にいたころ、仏間はまた、親族会議の会議室、いや、その非公式な二次会の会

場を兼ねていた。そこで連日連夜、深更まで、ときには夜を徹して会議がつづいていた。家の内はもとより、港に近しいところにあつた事務所、それからかかわりの深かつた銀行などのうちに漂っていた不安、ひいては町筋のあちこちでかわされている様々な私語——そういうものから、子供たちは心して遠ざけられてはいたが、遠ざければ遠ざけるほど、不安な空気は、空気のように子供たちの心臓にも侵入して来ていた。私たちは、大体のことは、ぼんやりと知っていた。

パニック、取りつけ、破産……、というようなことばも、いつとはなく耳に入り、なんのこともか具体的にはわからないうにしても、それが決してよいことを意味するものではないということだけは、たしかにわかつていた。

この古い家での親族会議や債務、債権者会議は、大正十二年の冬から春にかけて、断続的にひらかれ、数カ月はつづいた。そのたびごとに、かたがたの不安が濃くなつては行つたけれども、一面、子供たちにとつて、それは葬儀にも似て奇妙に賑かな催しごとのようにも思われたのである。何故なら、日本海岸では由緒のある廻船問屋であつた家で親族会議をひらくとなれば、人々は、山陰の境港、越前の敦賀港、越後の新潟、酒田、秋田、青森、松前へ渡つて函館、小樽、稚内、北の端の礼文島の香深港などの処々

方々からあつまつて来なければならなかつたからである。

丘の上の新しい家は、階下が六間、二階が二間という、古い家に比べれば『小さい家』であつたが、これらの親族会議は、古い家の、広く奥深い庭に面した三十畳敷の間でひらかれ、一応散会してから、改めて有志が暗い仏間で鳩首協議するといふかたちをとる習慣になつてゐた。

こうした親族会議がつづき、人の出入りのはげしかつた春、丘の新しい家の建築がはじまつた。古い家は抵当に入つてしまつていたからである。

ぼす、ぼす、ぼすという祖母の叩く木魚の音を聞きながら、私は古い家での出来事の数々を思い出してゐた。木魚の音は、一切のものはいつかはこの世の暗い夢のなかへ消え込んで行くのだ、という、この世の基調低音ともいへべき、そのリズムを刻んでゐた。そして無表情な金色の仏が、その暗い夢を象徴し、出来事のすべてを、さし出された手を通じてひめやかに、極めて自然に収斂してゐた。

そういうとき、暗い木魚の音のあい間から、古い家の、奥深い庭の夕景が浮び上つて来る。

たそがれの紫色の光が、琵琶湖をかたどつた広々とした池と流れに落ち、日中にぬくもつた水がひやりとする風をうけて肌をよせる頃、池の奥の暗い木立のあたりから、「よーそろー、よーそろー……」

という間伸びのした声が聞えて来る。その声について、

重い空気を颯々と截る鋭い羽の音が、木立をたらぬいて池をわたつて来る。声の主は、どういふ由来でそういう名がつき、またどういふ字をあてたものかいまとなつてはもう知る由もない、下働きの老人であつたけつ、つあである。けつあ老人は、この家に、まだ帆船も鉄の蒸気船もなかつた頃の、千石、二千石積みの和船の船頭であつた。そしてこのけつあ祖父は、難船漂流して、けつあのことばで言えは、おろしやまで行つて十年もとめおかれたことがあつた。帆船や鉄の船の時代が来るとともに、彼は老い込んで陸に上つた。そして、いま彼は庭で鶴を追つてゐるのである。よーそろーという掛け声も、海のことばであつた。

それぞれ千という名と萬という名を与えられたつがいの鶴は、朝早く鳥屋から出されると、一日中、池であそび、午後三時すぎ、日がかたむきはじめると池からあがつて木立のなかへ入りこむのが日々のならいであつた。夕刻、けつあ老人が、柄の長い奇妙な団扇のようなものを手にして、この木立のなかへ入り、鶴のうしろ側にまわつて

「よーそろー、よーそろー……、よーそろー、萬、よーそろー、千……」

と声をかけながら、次第に紫の色を濃くしてゆく空気を、この奇妙な団扇でゆつくりあおいで小さな風を起し、その

風がつかいの鶴の尻の柔毛をそよがせる。すると、鶴は二歩、三歩あるく。こうして、木立と池と叢林と巨きな巖などがしつらえられた広い庭の端から端まで、小半時ほどもかかってゆっくりゆっくりと鳥屋まで追って行く。

「よーそろー、千、よーそろー、萬……」

このつかいの鶴は、北の海の廻船問屋である（まわいら）鶴屋の象徴であった。彼らは、雛鳥のあいだに北海道の釧路荒野でとらえられ、けつつあ老人の手で育てられたものといわれていた。秋や春、シベリアから来る、あるいはシベリアへ行く渡り鳥がこの庭の池に何十何百か来て、去った。羽を切られていた鶴は、かわるがわるにやって来ては去ってゆく渡り鳥にとりかこまれ、いつも池にとり残されていた。そして夕方になると、けつつあ老人が団扇の化物をもって鳥屋につれもどしに来る。けつつあ老人は、身体つきのがっしりした、眼の鋭い爺やであったが、鶴の世話以外には、なんの仕事もしなかった。

この庭の片隅には、茶室と、長逗留をする客人用の離れ屋二棟がたっていた。離れ屋には、春夏秋冬を問わず、誰かしら客人がいた。それが旅の、名もしれぬ絵師や俳諧師であることもあれば、蕭条とした僧侶や京か東都で有名な画家であることもあり、お茶の宗匠や生花の師匠、箱庭つくりの先生、能楽師などが来ていることもあり、ときには

旅に病んだこれらの芸術家、遊芸の師匠などが一年二年とからだをやすめていることもあった。これらのひとびともまた、その個人個人がそうではないとしても、おのおの何百年という由緒をもった最後の芸術家たちであった。また明治のころには、民権自由の壮士たちがここにあつまった。

浅い池のなかに、千と萬とが、おのおの細い一本の肢で凝然とたちつくし、そのまわりを渡り鳥の群れが勢いさかんに水をはねとばしてあそびたわむれ、餌を奪いあつているようなとき、離れ屋の戸をくつて、絵師が、あるいは俳諧師が、しきつめられた暗緑の苔の海に浮ぶ飛石の島づたいに、庭のぜんたいを見はるかす母屋の縁先へ、こつこつと庭下駄の音を立ててやってくる。旅の芸術家たちではない、貴賓のための宿りは、庭の奥に、また別にたててあつた。

その縁先の奥、あけはなたれた三十畳敷の、徒らに広くさむざむとした部屋に、たったひとり、九十歳を越えた曾祖父が脇息に、それこそ鶴のように瘦せ、枯木のように枯れたからだをもたせかけている。畳の縁が一直線に伸び九十度に交差し、びしり、と音たててきめつけられたような厳しさがそこにあつた。襖の冷たい銀泥で、そこだけにはどんな絵師にも描かせなかつた。絵師、あるいは俳諧師、あるいは能楽師か、京の道具屋の主人かが、縁先でこの曾

祖父に挨拶をする。曾祖父は、無言で挨拶をかえし、縁先に席をすすめて、当人同士のほかは誰にもわからぬような話をはじめる。言うまでもなく、曾祖父はすでに隠居し、店の仕事は七十歳になる祖父と、東都の大学を出た私の父とにゆだね、日々を旅のものとの会話におくっていた。

曾祖父の背後の床の間には、千萬無量、と大書した自筆の掛軸がかかっている。字は、肩のいかつくない、むしろ中国人が書いたかと思われるような書体であった。

夏冬にかかわらず、扇子を手にした芸術家たちや道具屋たちが話しかけると、曾祖父は眼を瞑る。そして彼らが話しおわると、眼をひらいて応えをする。曾祖父の妻、つまり曾祖母にあたる人は、しばらく前に亡くなっていた。眉毛をおとし、齒には御歯黒をつけたひとであった。

千と萬とがたち騒ぐ渡り鳥の群れのなかに、微動もせずに行んでいる姿を、あるとき冷たい銀の色を背景にしたこの部屋から曾祖父が眺めていた。傍に人がいても、話しかけられても、一切応えをしないで小半時も黙していることも珍しくはなかったのだ。そういう沈黙のとき、その果てで、さっと日が翳り、渡り鳥のうちの一羽が無気味な叫び声をあげて水を打ち、中空に飛び上り、つづいて、それまでに戯れていた百千の鳥たちがいっせいに水をはなれ、木立をかすめ、忽ちに空に姿を消してしまふ。海をわたって

シベリアへ行くのである。

あとにのこったものは、それまで羽毛のなかにおさめていた片方の肢を水につけ、細い錦明竹のような二本の肢をふんばって、いっとき白い羽を大きくひろげて羽搏いてみるが、水をはなれることの到底かなわぬ千と萬の二羽である。凝然として立ちつくし、目のこまかい箆を手にして苦の上や石に散った夥しい鳥糞や羽毛の始末をするけ、つ、あ、老人を、千と萬は静かに横眼で睨むだけであった。しかも、け、つ、あ、老人がいつてしまえば、波立ちのおさまった水に映る、空しく白いおのれの姿を見るよりほかに、千と萬には術もない。

そういうつがいの立姿を、銀の間(とその広間は呼ばれていた)——から、曾祖父はじっとうち眺めて、

「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ」

と声に出して——人々は、はじめは曾祖父のこの声を笑い声であると思う——泣く。泪が、みいらか漆塗りの古仏のような皮膚を伝う。

曾祖父になれない客人は、みなこの声をきくとあやしい気持におとされてしまふ。笑うべき何事も起らず、ましてや泣くべきこともいささかもないときに、それが起るからである。あるとき、そういう場に居合せた、東京から来たという旅の幫間が機敏にその泪のつとを見抜き、ひとこと、



ふたこのことばを言った。曾祖父は、無言で、扇子を手にもつて、その先端をびたりと翳間の胸につきつけた。後にその翳間は、お手打ちにあうのかと思いましたが、と言つた。明治をさかいにして、四十年も以前にこの家に生れ、長く長く生きて、鶴屋の名とこの標識をもつた千石船から帆船、合子船、すなわち鉄と木と、帆と蒸気と併用した船、更に石炭を焚き濛々と煙を吐いて走る鉄船までの変遷をも見て来た曾祖父は、あるいは物を見すぎて来たのかもしれない、二羽の鶴と鶴屋そのものの運命をも見透していたのかもしれないなかつた。

鶴は、きよとんとして水に立ち、

「ほつ、ほつ、ほつ、ほつ」

と笑うように泣く曾祖父は、猿——もし年老いた、あるいは年老いすぎた猿が泣くとするならば——のように見えた。

こうして、この年老いすぎた老人は、ほとんど日がな一日を広い銀の間に坐りつくして過した。冬でも、雪が吹き込まぬ限りはあけはなしていた。客人の話に耳をかたむけるとききは書見をしたり、字を書いたりしていたが、曾祖父のことは言うならば江戸をはじめとして、横浜、神戸、樺太、北海道から日本海沿岸の港々にちらばっている身内の人々からの情報は絶えず受取り、しかも決して祖父と父

との仕事の運びに口出しはしなかつた。そして彼の、数百年にわたる家の歴史が、いまどうしようもなく閉じられようとしているのであることも、人々の話を聞くときには閉じているその眼で、明らかに見透していた。三井家や岩崎家のようにでなければ、大阪商船や日本郵船のようでなければ、戦争のあるたびにふとって行くのでなければ、事は必ずや廃れてしまうのである。私が生れて一年後の、大正八年、滑川に発して全国に波及した米騒動もまた、たとえそれが明治以前から地方的に断続して幾度もあったことはいえ、それが全国的な規模をもちえたということ、これも曾祖父にとつては異常な衝撃であつた。千石積、二千石積の和船は、大正の中頃まではそれでもなお生きのこつてはいたが、合子船や蒸気船が、湾の入口でけたたましい気笛を吹鳴することが出来るようになってからは、屋上の望楼も廢物になつてしまつていた。

朝の茶を喫しているときとか、あるいは日中、千と萬とに眼を据えて坐りつくしているときとかに、突然曾祖父がこの望楼へのぼる、と言ひ出すことがあつた。

そこまでのぼることは、しかし、足腰の自由でない曾祖父にとつても、また手助けをしなければならぬ家人にとつても、容易なことではなかつた。望楼は屋根の上につき出ている、家の構造、あるいは階層からいえば、四階といつ